

書き分け課題における学習者の相手意識と言語的調整

中 嶋 香緒里

1. 本研究の目的

本研究の目的は、書き分け課題における学習者の文章表現の特徴を明らかにすることによって、学習者の書く行為における相手意識や表現意識を、「言語的調整」という文章表現の事実にもとづいて検討することである。「言語的調整」とは、主として日本語教育の領域において扱われてきた概念であり、日本語母語話者の言語行為の社会言語学的側面を解明する枠組みである。本稿では、こうした日本語教育の知見を援用することで、学習者の言語行為の社会言語学的事実を把握するための方法を提案するという意図を含んでいる。

本稿でいう「書き分け課題」とは、同一の内容を異なる相手に伝達することを想定してそれぞれ書き分ける、という作業のことである。話すこと・書くことといった表現活動の指導においては、しばしば「相手意識」や「表現意識」という用語が用いられる。このことは、「誰かにある特定のメッセージを伝える」という言語の伝達機能、言語表現の対人性ということを重視した学習活動が想定されていることでもある。書くことの指導の場合は、読み手を意識した表現、読み手にいかに伝わる表現を心がけるかという点が、書くことの指導の大きなポイントの一つとなる。実際に読み手を設定して書くという実践などは、読み手を具体的にイメージすることによって書く事柄を明確にし豊かにすることを意図しており、同時に「相手に応じた表現」を学ばせることを重視している。たとえば大西（1998）は、「コミュニケーション作文」という指導実践を提案し、「書く場の条件」の一つとして、具体的な読み手を設定することの必要性を述べている¹⁾。書く行為をコミュニケーションの原理からとらえ、読み手のみならず、目的や媒材などを具体的に設定して、学習者の書く活動が発動されやすい「刺激要因」を学習活動に入れることを提案している。また大内（2001）は、「双方向型作文学習」を提案し、読み手を意識して書くだけでなく、読み手の反応も得られるような場を設定することで、書く行為が「伝え合い」というコミュニケーションとしての機能を果たしていくと述べる²⁾。このように、書くことの学習指導において学習者の相手（読み手）意識を中心にした実践やその重要性の指摘はこれまで数多く行われており、ここですべてをあげる事が難しいほどである。

しかしこうした相手意識の問題は、これまで多くの場合、書くことの学習指導上の問題として扱われてきた。すなわち、特定の相手を設定することが学習指導上いかに有効かを、実践によって示していくという立場のものが多く。このことは、相手意識にともなう思考（たとえば、書こうとする事柄に関する知識を相手がどれだけ持っているか、書き手と相手との関係や共有経験がどれだけ明確か、等を意識すること）と書く行為との密接な関係が、半ば自明のこととして考え

られているといえる。言い換えれば、学習者が自らの言語表現を相手に応じて適切に変化させるという事実は、書くことの学習指導においては当然の前提条件となっており、学習者のこうした調整行為を見越した上での「相手」の設定であるといえる。

しかし学習者は実際に、書く行為の中で自らの相手意識をどのように言語表現と関連させ実現させようとしているのだろうか。書くことの学習指導上の有効性から論じたこれまでの先行研究・実践報告からでは、書き手である学習者側の相手意識の所在や実際については必ずしも明らかにされてきていない。このような中で学習者側から相手意識を探る先行研究の一つとして、佐渡島（2001）があげられる⁹⁾。佐渡島は、学習者の作文とその後のインタビューから、学習者が書く事柄や目的と相互に関連させながら相手意識を分析・焦点化していく過程を明らかにしている。そこでは、特に書く事柄と相手意識との関係に着目し、学習者の相手意識の焦点化が、書く事柄の選択と関連していることを指摘している。このような先行研究に対し本稿では、より具体的な言語表現に即した相手意識の諸相について検討していく。つまり、学習者が自らの言語表現を相手意識によってどのように調整しているかという事実に着目する。というのも、書くことの指導で求められる「相手を意識して書く」「相手や場や状況に応じて適切に書く」といった目標は、「何を書くか」という点のみならず「どのように書くか」という点からも問題にされることが多いからである。

相手意識と言語表現との関係をめぐっては、とりわけ日本語教育研究の領域において明らかにされてきている¹⁰⁾。日本語教育においては、日本語母語話者が表出する言語形式そのものが非母語話者にとっての学習材料となる。特に敬語表現などの習得にあたっては、日本語母語話者が行う相手に応じた言語選択の違いそれ自体が、日本語学習者にとっては解明すべき課題となってきたのである。その中でとりわけ本研究が着目するのは、「言語的調整」という概念である。言語的調整とは、自分と相手との言語レベルが異なることが想定される場合に行われる、自らの母語使用の調整のことである。たとえば、幼児に向かって大人が話す独特の話し方をベイビー・トーク、教室で生徒に向かって話す教師の話し方をティーチャー・トーク、外国人に向かって話すときの話し方をフォリナー・トークなどと呼び、それぞれの言語的調整の実態が研究されてきている。言語的調整は、相手や場によって自らの言語表現を選択するという「レジスター（言語使用域）」の研究でもある。そして日本語教育における言語的調整の研究は、主として談話（話し言葉）の事例を検討の対象としていること、また談話において出現する表現形式上の特徴に焦点が当てられていること、の二つの側面をもっている。

本研究では、言語的調整に関するこの2側面をふまえた上で、さらに以下の3点を新たに考慮しながら援用することにする。

- ・学習者個々人の中で行われる、複数相手に対する言語表現の使い分けを扱うこと。
- ・談話（話し言葉）ではなく、書き言葉における言語的調整であること。
- ・表現形式上の調整だけでなく、内容構成上の調整についても確認してみる。

これら3点は、本研究で確認したい言語的事実が、日本語教育研究とは異なることを示している。本稿では、日本語教育における学習材、すなわち結果としての言語的調整というよりは、調整を行っている表現主体に焦点が当てられる。また話し言葉とは異なり、書き言葉は学習者個人の言語に関する知識がより全面的に発動されやすい。さらに表現形式のみならず内容構成上の調整をも視野に入れることによって、書き手は自らの限られた言語体系の中からいかなる選択行為をするかという言語行動の側面から検討しようとするものである。このように本稿では、日本語教育研究の知見を援用しながら、学習者の言語行動の社会言語学的側面を把握していく。

2. 調査方法

2-1. 調査対象

本調査では、のべ208名の中学生・高校生を対象とした⁶⁹⁾。そのうち、ここでは分析にたえうるまとまった内容を示した、以下の139名のデータを扱う⁷⁰⁾。

- ・筑波大学附属坂戸高等学校1年生36名(2002年1月23日実施)(以下、データではS-1と略記)
- ・筑波大学附属坂戸高等学校2年生32名(2002年1月23日実施)(上記と同様、S-2)
- ・筑波大学附属坂戸高等学校3年生15名(2002年1月23日実施)(上記と同様、S-3)
- ・筑波大学附属高等学校1年生22名(2002年2月22日実施)(上記と同様、Oh-1)
- ・筑波大学附属中学校2年生34名(2002年2月22日実施)(上記と同様、Oj-2)

2-2. 質問紙の概要

調査にあたっては、こちらで質問紙(→資料1参照、調査の際にはB4版1枚として使用)を作成し、被験者に記入してもらうという方法をとった。前述の通り、ここでの書き分け課題とは、同一内容の文章を伝える相手によって書き分けることを課題とするものである。よって、本調査では「異なる相手に向けて招待状を作成する」という状況設定を行い、招待文という、より相手意識の生じやすいジャンルを作成してもらうことにした。招待状というかたちで伝達しなければならない内容は、自分の学校で国際交流会が開かれることになったため、それに招待するというものである。質問紙に明示した状況設定を、そのまま以下に示す⁷¹⁾。

あなたの高校で、A高校の生徒や先生を招待して、交流会をひらくことになりました。A高校には留学生もいるので、国際交流会になります。あなたはその係に選ばれたので、A高校の生徒や先生向けに、交流会の招待状をつくらなければなりません。招待状を送る相手は、A高校の先生、日本人生徒、外国人留学生です。招待状をそれぞれに向けて、簡単に作ってみてください。ただし、招待状には次のことを必ず入れてください。

○交流会の日程：2月22日(月) 午後1時～、体育館

○記念誌を作る予定なので、各自3cm×3cmの写真を持ってくること。

この内容を、(1)自分と同年代の者、(2)自分と同年代の外国人留学生、(3)相手校の教師、の3種類の相手に向けて一度に3パターンの招待状を書くという課題となっている。(1)～(3)のどの相手も架空の人物であり、それぞれに詳しい属性を付してないために、それぞれの相手およびその差異については、各自で想像して書くことになる。相手意識とは、言い換えれば、相手をどのよう

に「扱う」かを決定する根拠であるといえる。そのため、学習者個々の相手に対する「扱い」の違いは、相対的にしか把握することができない。よって「(1)自分と同年代の者」を、学習者が比較的想定可能な相手であると仮定し、(1)に対して(2)や(3)の相手をどのように相対的に意識するかという点に着目していくのが、本稿の基本的な姿勢である。後述のデータ分析も、すべてこうした姿勢で行われている。「(3)相手校の教師」については、敬語指導などでこれまでに表現についてのなんらかの知識があると考えられるため設定した。また「(2)自分と同年代の外国人留学生」については、(3)とは対照的にこれまでの国語教室で指導を受けた機会がほとんどない相手だと思われる点、教師とはまた異なる基準で書き分けを行うであろうと考えられる点から、設定した。

2-3. 調査の手順

以上のような質問紙を被験者に配付し、15～20分程度で記入してもらった。授業時間やHRで実施したため、未記入欄があっても終了した。記入に際しては、調査者（筆者）は質問紙で提示した状況設定を説明するのみにとどめ、より書きやすいと判断できる相手から自由に記述してもらった。また調査にあたっては、書き分け方を調べるという本来の目的は明示せずに、単に日本語の伝達文の特徴を見る目的であると説明した。被験者が必要以上に表現を違えることを避けるためである。

3. 分析の観点と方法

本研究では、データ分析の観点を「言語的調整」という概念によって設定する。この概念は、前述の通り、自分と相手との言語レベルが異なることが想定される場合に行われる、自らの母語使用の調整のことである。言語的調整は、主として談話（話し言葉）の事例を検討の対象とし、また談話において出現する表現形式上の特徴に焦点が当てられてきた。本稿では、調整された結果としての言語的調整の諸特徴というよりも、学習者個々人の内部で生ずる選択行為そのものに焦点を当てることにある。そのため、言語的調整を①表現形式上の言語的調整と、さらに②内容構成上の言語的調整を加えて二つに分類し、この二つの観点から分析を行う。以下、それぞれの観点の概略とその設定理由について述べる。

3-1. 表現形式上の言語的調整

この観点については、特に日本語教育におけるフォリナー・トーク研究の成果を援用することにした⁹⁾。というのも、近年フォリナー・トーク研究においては、鄭（2002）のように、母語話者の言語的調整が談話のみならず書き言葉においてもなされることが確認され、談話とは異なる特徴が明らかにされてきているからである¹⁰⁾。鄭は、書き言葉においてなされる日本語母語話者の言語的調整を、「語彙選択上の調整」「文構造上の調整」「表記上の調整」「視覚上の調整」の四つに分類している¹¹⁾。鄭によれば、日本語母語話者のこうした言語的調整は、非母語話者にとって「理解可能なインプット」として機能するとし、書き言葉におけるフォリナー・トーク（鄭はこれを「フォリナー・ライティング」と命名）の意義を明らかにしている。すなわち、これら四つの分類項目は、非母語話者にとっての日本語習得面での効果という観点で設定され明らかにさ

れたものであるといえる。しかし本稿の書き分け課題では、読み手として、外国人（日本語非母語話者）だけでなく同年代の日本人生徒や目上である日本人教師も設定している。特定の読み手に対する言語的調整そのものに着目するだけでなく、複数の読み手を想定することで書き分けの特徴を明らかにすることがここでの課題である。よって、本研究では表現形式上の言語的調整を、以下の三つの項目で確認する。

○文長の調整

○語彙選択上の調整

○表記上の調整

3-2. 内容構成上の言語的調整

表現形式に対し、内容構成上の言語的調整という観点からは、与えられた状況設定を手がかりに、どのような情報をどのように配列して、課題である招待文の内容を構成しているかについて検討していくこととした。招待文として構成すべき内容は、質問紙に記載された状況設定において、すでにある程度規定されている。具体的には、以下の5点の基本的な情報が、すでに伝達すべき内容として学習者に提示されているのである。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・ 国際交流会であることの通知・ 開催日時・ 開催場所・ 写真を持ってくること・ 記念誌を作ること |
|---|

これらの情報がどのような配列で構成されているのか、また、これらの情報が省略されたり、逆に新しい情報が追加されたりするのか、追加される場合はどのような情報がそこに加わるのか、といった点に着目して分析していく。この観点は、相手意識に基づく表現を形式面でとらえるだけでなく、「相手を招待する」という目的のためにとられる配慮や方略といった言語行動面について明らかにすることを意図したものである。

3-3. 分析の方法

以上、①表現形式上の調整、②内容構成上の調整、の二つの分析の観点を設定した。いずれの観点についても、質問紙の3パターンの招待文をそれぞれ比較し、どのような異同があるかを調べるという手順で行う。基本的には、(1)自分と同年代の者に対する文（以下、同年代文）を基軸として、(2)自分と同年代の外国人留学生に対する文（以下、留学生文）との差異や、(3)相手校の教師（以下、教師文）との差異について確認していくこととする。

4. 分析結果

4-1. 分析の観点①の結果：表現形式上の調整

4-1-1. 全体的傾向

〈文長の調整〉

各パターン間で文数に極端に差が出るということにはなかったが、文長、つまり一文の長さには一定の傾向がみられた。この場合の文長とは、一パターン毎の総文数と総文節数をカウントし、一文あたりの文節数の平均を出したものである⁽⁴⁴⁾。3パターンそれぞれの文長を算出したところ、同年代文に比べて教師文の文長を大きくするという傾向が、最も多くみられた(139名のうち81名)⁽⁴⁵⁾。文長が大きくなる具体的な理由としては、例1のように同年代文よりもより多くの表現を加えて丁寧に伝達しようとしたり、あるいは未完成任务で伝達していたものを完成文にしたりする等の工夫が行われたことによる。

例1：[同年代文]「参加する人は3cm×3cmの写真を持ってきて下さい。」

⇔[教師文]「ご参加の際はお手数ですが3cm×3cmの写真をお持ち下さるようお願いいたします。」(Oh-1-7)

※Oh-1-7とは、筑波大学附属高等学校の1年生を表す。7は通し番号。以下同様。(筆者注)

※⇔は、同一学習者内での複数相手に対する書き分けを表す。(筆者注)

これに対し、留学生文の文長は、同年代文に比べて小さくなる傾向がみられた(113名のうち73名)。具体的な理由としては、一文あたりの情報量を減らして端的に伝達したり(例2)、記号や絵などで代替させたり(例3)といった工夫が行われたことによる。

例2：[同年代文]「このたび、本校にてA高校との交流会を行うことが決まりました。」

⇔[留学生文]「こんど、本校でA高校との交流会を行います。」(Oh-1-22)

例3：[同年代文]「各自3cm×3cmの写真をお持ち下さい」

⇔[留学生文]「持ち物→3cm×3cmの写真」(S-1-17)

「教師文⇔同年代文」の比較総数(139名)よりも「留学生文⇔同年代文」の比較総数(113名)が少ないのは、26名が留学生文を英語で書いたために、文節数のカウントができなかったことによる。このように、「日本語があまりできない留学生」というこちらの単純な設定に対し、ほとんどの学習者が英語表記など何らかの配慮をみせた。大別すると、より平易な日本語にする、英語を使用する、絵を使用する、といった三つの方略が用いられている。文長の短縮化は、これらの方略によるものである。これは、自らの言語表現をいかに簡略化させ他の表現に代替させるかといった場合にとられる、いくつかの方略のパターンとみることができる。具体的には、以下、語彙面と表記面から検討していく。

〈語彙選択上の調整〉

留学生文に顕著な特徴としての英語使用であるが、すべて英文(15名)や英単語まじりの日本語文など(52名)、日本語以外の言語および表記を選択することで相手への配慮をみせている(例4)。また日本語のみの使用であっても、3種類の相手を想定した場合、それぞれ異なる語彙を選

択していた。例えば留学生文には、例5のように、漢字を使用しなくてすむような同義語を考えたり、漢字名詞をより易しい表現に置き換えたりといった工夫がみられた。

例4：[同年代文]「交流会」⇔[留学生文]「party」「kouryukai」

[同年代文]「写真」⇔[留学生文]「photo」

例5：[同年代文]「交流会」⇔[留学生文]「コミュニケーションパーティー」「仲を良くする会」

[同年代文]「記念誌」⇔[留学生文]「記念の本」「本」

[同年代文]「各自」⇔[留学生文]「それぞれ」「個人個人で」

また教師文と同年代文との比較では、例6のような敬語を用いた書き分けが最も顕著であった。また、留学生文とは対照的に、例7のようにあえて漢字名詞の同義語を選択するという特徴がみられた。

例6：[同年代文]「来て下さい」⇔[教師文]「お越し下さい」

[同年代文]「A高校」⇔[教師文]「貴校」

例7：[同年代文]「開く」⇔[教師文]「開催する」

[同年代文]「持ってきて下さい」⇔[教師文]「持参して下さい」

こうした語彙レベルの書き分けは、書くことの指導でしばしば提示される「相手に応じた適切な語句の選択」という目標に対し、学習者の側からその「適切さ」の認識の実態を示すものといえる。同年代文に対して、留学生文はより平易に、教師文はより丁寧に、というのが全体的傾向としての「適切さ」の基準であったといえる。すると、平易さを意識した場合は名詞に書き分け箇所が集中するのに対して、丁寧に意識した場合には動詞に比較的集中するという全体的な傾向が指摘できる。

〈表記上の調整〉

特に留学生文においては、漢字にふりがなをつける(13名)、すべてひらがな表記(14名)、すべてカタカナ表記(2名)といった例がみられた。相手の日本語に関する知識をイメージした結果行われた調整である。また、留学生文および同年代文には、イラストで全体を飾ったり、飾り字や記号を使用したりして目を引くような装飾をした例が多数みられた(同級生文30例、留学生文52例、教師文10例)。留学生文の場合、イラストは単なる飾りのみならず、文章の代用(特に3cm×3cmの写真の説明に多い)や補助的な情報として機能していた。一方、教師文にはイラストや飾り字がほとんどなかった。また、相手の属性を超えた特徴としては、強調したい内容を四角で囲む、字を大きくする、箇条書きにする、といった視覚上の工夫がみられた。これらの工夫は、学習者が与えられた情報をそれぞれ序列化し、最も伝えるべき情報を視覚的に強調するといった、伝達内容の再構成ととらえることができる。

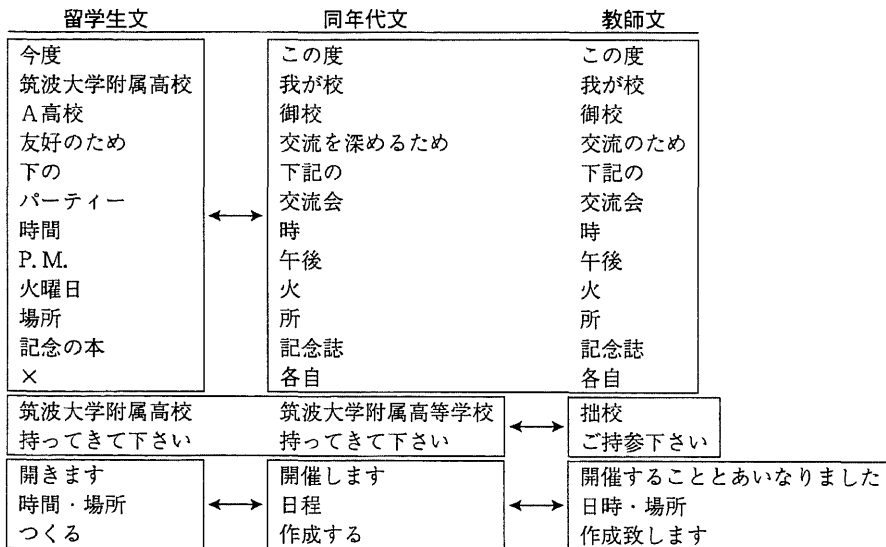
4-1-2. 個別事例の分析

表1は、筑波大学附属高等学校1年生の結果(資料1参照)を、同年代文を中心にして情報ごとに配列し直したものである。3-2.でも述べたように、伝達内容はこの場合、主として5点の情報で構成されている。しかし内容構成の仕方について全体的傾向を分析したところ、これら5点

表1：Oh-1-12の事例（下線部は筆者）

内容構成	留学生文	同年代文	教師文
ア	こんにちは。	こんにちは。	拝啓 風薫る五月、いかがお過ごしでしょうか。
交流会の通知	今度、筑波大学附属高校とA高校の友好のために下の時間、場所でパーティを開きます。	この度 我が校と御校の交流を深めるため、下記の日程で交流会を開催します。	さて、この度 我が校と御校の交流のため、下記の日時・場所で交流会を開催することとあいなりました。
イ		お暇な方はぜひいらして下さい。	ぜひいらして下さい。
開催日時 開催場所	時間：3月12日(火曜日) P.M. 1:00～ 場所：筑波大附属高校 体育館	時：3月12日(火) 午後1:00～ 所：筑波大学附属高等学校 体育館	時：3月12日(火) 午後1:00～ 所：拙校体育館
ウ			
写真 記念誌	記念の本をつくるので、3cm×3cmの写真を <u>持ってきて</u> 下さい。 (写真の絵：筆者注)	なお、 <u>記念誌を作成する予定</u> なので、各自3cm×3cmの写真を <u>持ってきて</u> 下さい。 (写真の絵：筆者注)	なお、 <u>記念誌を作成致します</u> ので、各自3cm×3cmの写真を <u>ご持参</u> 下さい。 (写真の絵：筆者注)
エ			啓具（ママ：筆者注）

図1：Oh-1-12の語彙選択の分布（×は、該当語がなかったことを示す）



の基本情報は、「交流会の通知」「開催日時、開催場所」「写真、記念誌」という三つの群に分かれ、それぞれの情報の前後に新たな伝達内容が付加されるということがわかった。そのため表1では、三つの情報群それぞれの前後に付加される情報配列パターンをア～エとし、各データに基づいて記入した。また表1においては、調整されたと考えられる語に下線をひいた。さらに図1は、表1の下線部に基づいて語の書き分けの偏りを示したものである。

まず表1であるが、この学習者の場合、すべて日本語表記で書き分けを行っている。アやエの部分から明らかのように、とりわけ教師文に対しては、時候の挨拶など手紙形式を用いて招待文を作成しようとする意識がみられる。交流会の日程が3月の予定であるにも関わらず「風薫る五月」とあるのは明らかに誤用であるが、ジャンルに関する自分なりの既有知識を活用しながら構成しようとしている。

この学習者の語彙選択の意識について、図1の結果から考察する。この学習者の場合、多くの語は「留学生文⇔同年代文・教師文」という構図で書き分けられていることがわかる。これは、留学生との知識の差を、教師文とのそれよりも大きくかつ具体的にイメージした結果であると考えられる。この学習者の留学生文に対する語彙選択には、次のような意識が働いていると考えられる。

- ・指示代名詞を固有名詞にし、情報を直接示す

例：[同級生文・教師文]「我が校」「御校」⇔ [留学生文]「筑波大附属高校」「A高校」

- ・省略表現は使わない

例：[同級生文・教師文]「時」「所」「火」⇔ [留学生文]「時間」「場所」「火曜日」

- ・より平易な表現の同義語を使う

例：[同級生文・教師文]「交流会」「下記の」「記念誌」

⇔ [留学生文]「パーティー」「下の」「記念の本」

- ・難しいと思われる語は使わない

例：[同級生文・教師文]「各自」⇔ [留学生文]×(使用しない)

これらの特徴は、留学生の知識をイメージしたうえでの「わかりやすさ」の配慮であるといえる。想定される読み手の知識が書き手のそれと大きく異なる場合には、学習者は「わかりやすさ・つたわりやすさ」の方略として、平易な表現や直接的な表現を選択することがわかる。そして全体的傾向分析でも述べた通り、名詞に集中しているのが特徴である。

一方、教師文に対しては、「拙校」といったへりくだりの表現や、「ご持参」のように語頭に「ご」をつけた尊敬表現など、いわゆる敬語の規則を適用させていることがわかる。また、「つくる」・「作成する」・「作成致します」の例や、「開きます」・「開催します」・「開催することとあいなりました」の例は、3種類の読み手それぞれに異なる語で書き分けている例である。この2例は、他の学習者においても書き分け頻度の高い表現である。留学生文では単語そのものをより平易なものに置き換えてしまうのに対して、教師文では使用単語それ自体は変化させず、「作成+する→作成+致します」「開催する→開催する+こととあいなりました」というように、補助的な表現を加えることによってより丁寧な表現をめざしている。教師文の場合は、「丁寧さ・礼儀正しさ」の配慮がなされるわけだが、この事例の学習者がとった方略としては、語レベルよりもむしろ文レベルで書き分けの意識を働かせたとみることができる。

以上、表現形式上の言語的調整について分析・考察してきた。学習者は、読み手に応じて適切

であると思われる表現を選択しながら書き分けを行うわけであるが、その「適切さ」の基準やそれに対応する表現には様々なレベルが存在することがわかる。しかし表現形式の選択肢が豊富にない場合は、相手への配慮が現れにくくなるのであろうか。こうした点を確認するために、以下、内容構成上の言語的調整というもう一つの観点から、学習者の相手意識について検討する。

4-2. 分析の観点②の結果：内容構成上の調整

4-2-1. 全体的傾向

招待文に盛り込むべき情報として学習者に予め提示されたのは、質問紙の状況設定に書かれたもののみである。具体的には、3-2.で示したような5点の情報である。この5点の情報がどのように配列されているかを分析した結果、この5点の情報のみで招待文を構成した学習者は7名にすぎず、ほとんどの学習者が、5点以外の新しい情報を追加したり、逆に削除したりといった、内容構成上の調整を行っていたのである。以下、追加情報と削除情報について、そしてそれらの配列について分析・考察していく。

<新しい情報の追加>

対象データの約95%にあたる132名の学習者が、何らかの情報を新たに追加していた。うち80名が3パターンの招待文すべてに情報を追加していた。追加された情報の具体的内容を検討していくと、以下の6点に大別できる。

- a 交流会への積極的な参加を促すもの
- b 交流会の具体的な内容を示したり楽しさを強調したりするもの
- c 交流会の趣旨や目的・意義を説明するもの
- d 挨拶文
- e 5点の基本情報を補助するもの
- f その他

aの多くは直接的な誘いの文章で表されており、相手の違いにかかわらず、ほとんどの事例に含まれていた。招待文というジャンルを完成させるために最も必要な文章として採用されている。

例8：[教師文]「ぜひ来て下さい。お待ちしております。」

[同年代文]「よかったら、きがるに参加してみてください。」

bについては、学習者自らが交流会の具体的な内容を想像して書いており、特に同年代文と留学生文に向けられた事例が多い。具体的には、ゲームなどをする楽しい会であること、友達がたくさんできる会であること等を強調し、相手に楽しさを強調することで「行きたい」と思わせる工夫をしている。

例9：[同年代文]「いろんなゲームなどの企画も用意してあります。」

[留学生文]「日本での友だちの輪を広げましょう！」

これに対し教師文ではむしろc, dが比較的多い。まずdの場合は、例10のように、時候の挨拶など手紙文の形式の応用によるものが含まれる。傾向としては、同年代文や留学生文には採用しないが教師文にのみ採用する、という学習者が多い。教師—生徒という人間関係の上下を意識し

た場合には、敬語使用という語レベルだけでなく、文章全体の構成も書き分けているといえる。

またcについては、例10のように交流会の目的や趣旨・意義などの説明も、教師文にのみ書かれる傾向にある。会の趣旨を説明し、開催することによって得られる効果を述べることによって、招待する理由を提示し、足を運んでもらうという相手の行動を促す正当性を示していると考えられる。

例10：[教師文]「梅の花も咲き、におい香る季節となりました。おん校の方ではいかがでしょう。」(dの例)

[教師文]「本校にとっては国際交流会ということで、大変よい経験が得られ、また貴校の生徒との関係も深まると思います。」(cの例)

fについては、校内地図や交通アクセス情報などが含まれ、実際に来てもらうために必要だと思われる情報を判断して追加していることがわかる。

例11：[同年代文]「体育館の入り口」(←校内地図を書いて指示。筆者注)

[教師文]「営団地下鉄丸ノ内線茗荷谷駅徒歩10分」

また例12のように、留学生文において開催場所を書いた後に以下のようなコメントを書き入れる例もあった。自ら書いたものがうまく読み手に伝わらない場合も想定して、その際でも読み手に来てもらえるよう配慮した文であるといえる。

例12：[留学生文]「わかるかな？わからなかったら近くの人に聞いて下さい」

追加情報の全体的な傾向をみていくと、中学生のデータにはaやeの情報が多く、b、c、fの情報はむしろ高校生によくみられた。aは招待文というジャンルと密接に関わるものであり、eは既に提示された5点の基本情報と関わるものである。これに対しb、c、fは、質問紙で与えられた情報から離れ、より書き手側の判断に基づき書き手の想像が反映された情報であるといえる。学年でこのような差が出た事実は注目に値する。

〈情報の省略〉

追加情報の一方で、あらかじめ5点の情報が指定してあるにもかかわらずあえて省略された情報もあった。およそ半数にあたる62名の学習者に情報の省略がみられた。省略の多くは留学生文にみられ、中でも「記念誌を作る」という情報が最も多く省略された(59名が省略)。情報の重要度を序列化し、省略しても問題ない情報と判断したといえる。記念誌の情報を入れることよりも、入れることによって生じる長文化や、「記念誌」という単語が理解されない可能性を回避することの方を優先させたのである。読み手のもつ知識をイメージし、「招待し来てもらう」という目的をより円滑に達成するためになされた工夫であるといえる。

〈情報の配列〉

次に、5点の基本的な情報と追加(・省略)情報の配列の仕方について、3パターン間で比較を行った。具体的には、表1、表2、表3のように、基本情報のどの部分に追加情報があるかということ調べ、3パターン間で比較・分析した。

比較の結果、3パターン間で配列を大幅に変化させた学習者はほとんどいなかった。同時に三

つの招待文を書くということは、おのずと前の文章を参照することになるため、その影響であると考えられる。しかし全体的な傾向としては、同年代文・留学生文においては文末エに新しい情報の追加が比較的集中するのに対し、教師文においては文末エだけでなく文頭アや、交流会を通知した後イにも分散して追加する傾向がみられた。留学生文・同年代文に比べ教師文の場合は、それぞれの情報の間により細かく誘い文や会の趣旨説明文などを挿入することによって、「丁寧さ」を表現し、読み手の参加意識を高める工夫をしていると解釈できる。

4-2-2. 個別事例の分析

表2は、筑波大学附属坂戸高等学校1年生(S-1-2)の結果を、同年代文を中心にして情報ごとに配列し直したものである。5点の基本情報以外に新たに追加された情報については、下線を引いて示した。S-1-2の場合は、3パターンともイの部分に情報を追加した内容構成となっている。3種類の読み手すべてに情報追加を行っているが、その内容が留学生・同年代文⇔教師文で異なる。留学生文・同年代文はほぼ同じ内容で、一緒に楽しい会にしようとする誘う内容になっている。これに対し教師文では、「貴校は国際交流科などや留学生等、国際化が進んでおり、本学校の生徒と交流していただきたく、招待状をお送りしました。」という文が追加されている。相手校に国際交流科があるという情報は質問紙にはないもので、学習者S-1-2が自ら想像し創出した文脈である。S-1-2がこのような文脈を創出した背景には、これまでの本人の経験が関与しているのかもしれないが、今回の調査ではそこまで考慮することはできない。しかしこうした文脈の創出は、「相手校は国際化が進んでいる」→「そのような学校と本学校とで交流をしたい」→「だから招

表2：S-1-2の事例（下線部は筆者）

内容構成	留 学 生 文	同 年 代 文	教 師 文
ア			
交流会の 通 知	国際交流会招待状 坂戸高校で交流会をやります。	国際交流会招待状 この度、坂戸高校体育館にて、 A高校との交流会を行うことになりました。	国際交流会招待状 この度、坂戸高校にて貴校との国際交流会を行うことになりました。
イ	<u>交流を深め、楽しい会にしましょう!!</u>	<u>2校の交流を深め、楽しい会にしましょう。</u>	<u>貴校は国際交流科などや留学生等、国際化が進んでおり、本学校の生徒と交流していただきたく、招待状をお送りしました。</u>
開催日時 開催場所	2月22日(金) PM1:00~ 体育館でやります	交流会日程 2月22日(金) 午後1時~ 場所 体育館	日程 2月22日(金) 午後1時から 坂戸高校体育館にて
ウ			
写 真 記 念 誌	交流会の記念誌を作る予定です。3cm×3cmの写真を持ってきて下さい。	その際、交流会の記念誌を作る予定です。各自3cm×3cmの写真を持ってきて下さい。	お願い。 交流会の記念誌を作る予定です。各自3cm×3cmの写真を持ってきて下さい。
エ			

待状を送っている」というように、招待状を送るという自らの行為に対し理由づけを行うためになされたものと解釈できる。このようにS-1-2の場合は、「招待する」という目的達成のために二つの方略を用いていることがわかる。留学生や日本人生徒という同年代の相手に対しては、来てもらうことによって得られる価値を強調するという方略をとるのに対し、教師という人間関係の上下を意識した場合には、まず招待するという自らの行為の理由を説明し正当化することで、交流会への参加という相手の行動を促すための方略をとるのである。交流会の通知の直後にこのような説明を入れ、そのうえで具体的な日程を通知していくという配列になっている。

また表3の学習者S-1-28の場合は、追加情報の内容や情報の構成の仕方が、3パターン間でそれぞれ異なっていることがわかる。まず同年代文と留学生文を比較してみると、留学生文の情報内容が減少している。留学生文では、「開催日時・開催場所」の情報と同時に「交流会の通知」を1文で行っているため、この2点の情報に関しては、同年代文とはほぼ同様の情報提示であるといえる。しかし「記念誌を作る」という情報は省略されており、写真のサイズを示して当日持ってくるのみ強調している。またウの部分では、同年代文においては「この交流は、先生方、生

表3：S-1-28の事例（下線部は筆者）

内容構成	留 学 生 文	同 年 代 文	教 師 文
ア			
交流会の通知		今度、A高校と坂戸高校で交流会をひらくことになりました。	この度、A高校と、坂戸高校の交流会を開こうとおもっています。
イ			<u>A高校様は、外国人留学生も居り、国際交流会が、できると思い、とてもうれしくおもっています。意味のある交流会にしたいとおもいます。教員、生徒一同楽しみにしているので、どうぞご来場ください。</u>
開催日時 開催場所	2月22日(金) 午後1時～、 体育館で、A高校と坂戸高校の交流会をひらきます。	2月22日(金) 午後1時～、 体育館で、ひらきたいとおもいます。	期日：2月22日(金) 午後1時～ 場所：体育館
ウ	<u>Please Come on !!</u>	<u>この交流は、先生方、生徒、留学生のみんなでやっていきますので、友達作りなど、コミュニケーションをとって、楽しくできたらいいですね。</u>	
写 真 記 念 誌	写真(3cm×3cm)も、もってきてください。	そして記念になるように記念誌をつくろうとおもうので、写真(3cm×3cm)を持ってきて下さい。	持ち物：写真(3cm×3cm) 記念誌を作成する予定です。
エ		楽しみましょう。	

徒、留学生のみなどでやっていきますので、友達作りなど、コミュニケーションをとって、楽しくできたらいいですね。」というように、交流会の参加者の情報や「友達作り」といった、より詳細で具体的な内容が想定され追加されている。これに対し、留学生文では「Please Come on !!」という英文を1文書くにとどまっている。こうしたことから、留学生文の作成においてはまず伝達情報の序列化が行われ、「記念誌を作る」という情報より「交流会に来てもらう」という情報が優先されたことがわかる。写真さえ持って当日来てもらえれば、記念誌のことを知らなくても問題は生じないと判断したのである。自らが招待する交流会がどのようなものであるかを説明するよりも、実際に来てもらうために必要な最低限の情報のみを提示する方が、相手の行動を起こさせるために有効な方略であると解釈し、こうした内容構成になっているものとみることができる。

一方、同年代文と教師文とを比較してみると、追加情報の内容や構成の仕方が両者で異なっていることがわかる。前述した通り、同年代文での追加情報は、交流会の具体的な内容の説明であったのに対し、教師文では、交流会の内容よりもむしろ、交流会を行うことに対する招待者側の意図や気持ちを述べながら来てもらいたいという意志を提示する内容になっている。「A高校様は、外国人留学生も居り、国際交流会が、できると思い、とてもうれしくおもっています。教員、生徒一同楽しみにしているので、どうぞご来場ください。」とあり、学校間の単なる交流ではなく、国際交流となることの意義づけを強調している。このことは、教師—生徒間という人間関係の上下を意識した表現のみならず、向こうから自分の方へ足を運んでもらうという「招く側」としての、いわば「恩恵」関係の表現をもあわせもっているといえる⁽¹²⁾。そしてこうした情報は「交流会の通知」のすぐ後、日程等の具体的な情報にうつる前に配置されている。同年代文とのこうした配置の違いは、交流会を同等に楽しむ仲間としての「同年代者」に向けてと、交流会というこちら側の趣旨に賛同してもらった上で来てもらう目上の「教師」に向けてのもの、というように、相手との心的距離感がそのまま反映されているといえる。そのため、これらの追加情報の内容と配置の違いは、どこまでの情報を順に共有した上で相手に働きかけを行うかという、書き手の判断を表出しているものと解釈することができる。

5. 分析結果のまとめと考察

以上の分析結果から、学習者は表現形式面と内容構成面のいずれにおいても、読み手に応じて様々に自らの言語を調整していたといえる。まず表現形式面での調整であるが、同年代文に比べ留学生文では、相手の日本語の知識を想定し、適切な書き分けの基準として「平易さ」「簡潔さ」が重視されていた。その結果、日本語以外の言語の使用やイラストの多用だけでなく、文長の短縮化や名詞を中心とする語の変更などの調整が行われていた。一方教師文に対しては、人間関係の上下を意識した「丁寧さ」「敬意」が、多くの学習者の書き分けの基準となっていた。従来、人間関係の上下についての言語表現指導では、敬語を中心とする待遇表現をいかに使用するかという内容で行われてきている。しかしこの結果からは、敬語使用だけでなく、文長の拡大や漢字名詞の使用、動詞を中心とする語構成の変更など様々な調整がなされていることが確認できた⁽¹³⁾。

そして、この調査結果でより着目すべきは内容構成の調整である。調査者側で設定した伝達内容に対し、学習者は自らの判断でそれを省略しあえて伝達しないという調整を行ったり、逆に新たな文脈を創出しながら情報を追加したりしていることが確認できた。情報削除は特に留学生文に顕著であり、教師文でほとんどみられないことから、留学生という読み手を意識した特徴的な調整であるといえる。追加情報については、留学生文に対しては同年代文と同様、交流会の内容を強調する文の追加が目立つのに対し、教師文では時候の挨拶や交流会の趣旨説明文などの追加が多く見られた。このことは、交流会という目的に対する相手の立場の違いを、書き手が判断して書き分けた結果であると解釈できる。すなわち、留学生は交流会をともに楽しむ立場であり、教師は交流会という趣旨に賛同して協力してもらう立場という違いである。その分、教師に対しては招待し来てもらうための正当な理由付けが必要となる。

また情報の配列についても、同年代文・留学生文⇔教師文という傾向で書き分けの特徴がみられた。同年代文・留学生文に比べ教師文では、追加情報を基本情報の間により細かく挿入し、伝達内容の構成を複雑化させるという事実が確認できた。こうした情報配列の工夫は、相手（読み手）との情報の共有順序を考慮しながらなされる、招待文というジャンル構成のための方略であると解釈した。

以上のように、学習者は相手を意識することによって、語の選択といった表現形式のみならず、文章全体の構成をも意識しながら、自らの「招待する」という書く行為の文脈をつくりあげようとしていることがわかる。以下、これらの結果について、「待遇表現」「書くことの学習指導と相手意識」の二つの観点から考察する。

○待遇表現

現在、待遇表現の研究は、「敬語」から「敬意行動」へとその焦点を移行させている⁽⁴⁴⁾。すなわち、相手への配慮（敬意）というものを、敬語の表出だけでなく、相手との円滑なコミュニケーションを確立するための言語行動すべてを視野に入れて考えようとするのである。杉戸（1997b）は、敬意表現を二つに大別している⁽⁴⁵⁾。一つは、いわゆる敬語や待遇表現の使用を指す「言語形式としての敬語」、もう一つは、語形式や文法形式の選択のみならず相手によって言語行動それ自体を変化させる「言語行動としての敬語」である。そして杉戸は、後者の敬語表現についても力点をおくべきであると主張する。本研究で得られた結果は、後者にかかわるものであるといえる。すなわち、調査結果で得られた内容構成上の調整などは、読み手を意識して行われた、伝達する・しないの判断をも含めた一つの言語行動の例であると解釈できるのである。このことは同時に、これまで国語科でいわれてきた「場や相手に応じた適切な表現」について、学習者の側の実態を、特定の言語形式の表出からではなく目的のために調整された言語行動という側面からとらえることでもある。

また待遇表現の新しい研究として、「ポライトネス理論」がある。「談話におけるポライトネス（丁寧さ）理論」を提唱している宇佐美（2001）は、言語表現の対人性を、使用される言語形式

の丁寧度ではなく、相手との関係のためにとられた言語行動の「効果」という語用論的な問題に着目すべきであるとする¹⁰⁰。よってポライトネスという考え方においては、例えば「タメ口^{ぐち}」を使用したとしても、それが相手との人間関係を深めるための方略であるとするならば、それは「ポライト（丁寧）」であるとされる。しかしこのような「ポライト」は、通常表現から逸脱した表現をとることによってのみ、相対的にポライトであると評価することができる。本調査は、同年代文を基軸として留学生文・教師文を比較することによって、相手意識の表出を確認するという方法をとった。この点においては本研究は、書くことの側から、こうしたポライトネスのような「敬意行動」にかかわろうとするものであるといえる。実際、本調査の結果からは、敬語の不使用や誤用などが一定程度みられる。しかし、比較によって確認した「書き分け」の事実からは、従来敬語や待遇表現とは直接関係しないと考えられた言語表現にも、相手への配慮というものを見いだすことができる。また内容構成上の調整からもわかるように、相手への配慮は、何をどのような順序で書くか、あるいは書かないかという行動面にも現れるのである。

○書くことの学習指導と相手意識

本稿の試みは、これまでの書くことの学習指導で必ずしも明確にされてこなかった学習者の相手意識を、日本語教育研究の成果を援用して把握するというものであった。「相手に応じた適切な表現」を、学習者の側から把握するということによって得られた今回の結果は、学習者の相手意識を理解するうえでの示唆の一つとなる。学習者が相手の違いによって想定する「適切さ」は、表現形式の選択のみならず、伝達内容の追加・配列といったジャンル生成面での判断にまで及んでいる。外国人留学生への配慮という、これまであまり書く機会がなかったと思われる相手への文章をも、比較考察の対象として分析したことにより得られた結果である。書くことの指導の一つとして学習者になされる「適切さ」の指示や評価は、こうした学習者の実態を合わせて考える必要があると思われる。

またこれまでの日本語教育研究では、日本語母語話者の言語的調整の実態は成人のものしか確認されてきていない。その点において本稿では、学校教育段階の学習者の実態の一端を新たに把握することができたといえる。国語教育研究と日本語教育研究では、当然のことだが対象が日本語表現であっても、問題の基盤や諸条件が全く異なる。しかし今回、それぞれが焦点を当ててきた部分の違いを検討したことで、相手意識の調査方法を構想する一助となった。両領域をこのように関連的に検討することによって得られる有効性については、今後も考えていきたい。

6. 今後の課題

今回の調査は、書き手である被験者の背景要因をほとんど特定しない状態で行ったものである。招待文というジャンルに関する知識や経験、想定された読み手の属性に対する経験知、自らの言語的調整へのメタ認知等を視野に入れる必要がある。また、本調査で設定した「相手」は、どれも親疎のレベルにおいては同列となる。親疎を考慮した場合の相手意識の違いについては、今回はいったん考察の対象外とした。これらの点において、今回の調査は予備的性質が強く、調査方

法の整備が課題となる。書くことの学習指導実践上の位置づけを考えていく上でも、今後は授業場面での調査に移行する必要があると考える。

また、招待文以外のジャンルによる違いや発達の観点からの分析も、これからの課題である。国内外の作文の心理学的研究を視野に入れながら、発達段階をふまえた相手意識の実態についても考えていきたい。

〈謝辞〉本調査にご協力くださいました、浅田孝紀先生（調査時：筑波大学附属坂戸高等学校、現：東京学芸大学附属高等学校）、飯田和明先生（筑波大学附属中学校）に感謝申し上げます。

注

- (1) 大西道雄（1998）『コミュニケーション作文の技術と指導』明治図書，pp. 37-40.
- (2) 大内善一（2001）「新しい作文授業の構想と展開—双方向型作文学習の授業研究—」井上一郎編著『国語科の実践構想—授業研究の方法と可能性—』東洋館出版社，pp. 124-145.
- (3) 佐渡島紗織（2002）「子どもの作文にみる相手意識—小学生へのインタビューによる調査—」全国大学国語教育学会『国語科教育』第50集，pp. 50-57.
- (4) 相手意識と言語表現との関係については、もちろん日本語教育以外の領域においても研究されてきている。認知心理学においては、書く行為の過程における子どもの方略を扱ったものや、書くことの対話性について検討したものはこれまでにいくつも発表されている。（たとえば、安西祐一郎・内田伸子（1981）「子どもはいかに作文を書くか？」日本教育心理学会『教育心理学研究』第29号，pp. 323-332.，内田伸子（1990）『子どもの文章』東京大学出版会，茂呂雄二（1988）『なぜ人は書くのか』東京大学出版会，等がある）

また、言語学においても以下のような成果がある。

M. A. K. ハリデー，R. ハッサン著，笈壽雄訳（1991）『機能文法のすすめ』大修館書店
杉戸清樹（1997a）「話しことばの待遇表現」『日本語学』第16巻第7号，明治書院，pp. 81-88.，杉戸清樹（1997b）「敬語教育の課題—敬意行動の中の敬語を—」『日本語学』第16巻第12号，明治書院，pp. 4-13.

本稿ではこれらの成果もふまえながら、特に日本語教育研究における成果および概念を援用する。

- (5) のべ208名の調査対象の内訳については、以下の通りである。
 - ・筑波大学附属坂戸高等学校1年生37名（2002年1月23日実施）
 - ・筑波大学附属坂戸高等学校2年生33名（2002年1月23日実施）
 - ・筑波大学附属坂戸高等学校3年生18名（2002年1月23日実施）
 - ・筑波大学附属高等学校1年生41名（2002年2月22日実施）
 - ・筑波大学附属中学校2年生79名（2002年2月22日実施）
- (6) 本稿での書き分け課題は、3人の異なる相手に向けて書き分けるというものであるが、一

- 人あるいは二人分しか書いていないものはデータから除外することにした。
- (7) 「交流会の日程」の日付については、調査実施日に応じて各学校ごとに不自然にならないよう変えて提示した。
- (8) フォリナー・トーク研究の主たる文献としては、以下のものがあげられる。
- 志村明彦 (1989) 「日本語の Foreigner Talk と日本語教育」日本語教育学会『日本語教育』第68号, pp. 204-215., 小林浩明 (2000) 「フォリナー・トーク再考—日本語先行研究における定義を中心に—」『龍谷大学国際センター研究年報』第9号, pp. 25-34., 大平未央子 (2001) 「フォリナー・トーク研究の現状と展望」大阪大学言語文化部『言語文化研究』第27号, pp. 335-353., A. スクータリデス (1981) 「日本語におけるフォリナー・トーク」日本語教育学会『日本語教育』第45号, pp. 53-62.
- (9) 鄭恵允 (2002) 「『接触場面』における日本語母語話者の言語的調整に関する一考察—『フォリナー・ライティング』の概念形成に向けて—」桜花学園大学『桜花学園大学研究紀要』第4号, pp. 257-265.
- (10) 鄭 (2002), 前掲文献
- (11) 文長の算出方法については、以下の文献に拠った。市川孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』教育出版, p. 211.
- (12) この場合の「恩恵」関係というのは、相手に行為をおこしてもらい—それを受ける、といった関係のことをさす。(菊地康人 (1997) 『敬語』講談社, pp. 51-52. 参照)
- (13) また本稿では詳述できなかったが、全体的な傾向として、特定の相手に対してのみ調整が行われるという事例は極めて少なく、3パターンともほとんど調整が行われないか、あるいは3パターンともなんらかの調整が行われているかのどちらかに分かれる。こうした事実の意味を判断するには、さらに焦点化した調査を行う必要がある。
- (14) 坂本恵 (2002) 「『敬語』『待遇表現』『敬意表現』」『日本語学』第21巻第5号, 明治書院, pp. 64-71., 坂本恵 (2001) 「『敬語』と『敬意表現』」『日本語学』第20巻第4号, 明治書院, pp. 14-21., 井出祥子 (2001) 「国際化社会の中の敬意表現—その国際性と文化的独自性—」『日本語学』第20巻第4号, 明治書院, pp. 4-13., 菊地康人 (1997) 『敬語』講談社, pp. 29-88.
- (15) 杉戸清樹 (1997b), 前掲論文
- (16) 宇佐美まゆみ (2001) 「談話のポライトネス—ポライトネスの談話理論構想—」国立国語研究所『談話のポライトネス』 pp. 9-58.

〈資料1〉

2002.2.22.

※このアンケートは、日本語における案内文・伝達文の特徴を見るためのものです。

あまり時間をかけずに、気楽に答えて下さい。ご協力どうぞよろしくお願いいたします。

筑波大学教育学系 中嶋 香緒里

【状況設定】


あなたの高校で、A高校の生徒や先生を招待して、交流会をひらくことになりました。A高校には留学生もいるので、国際交流会になります。あなたはその係に選ばれたので、A高校の生徒や先生向けに、交流会の招待状を作らなければなりません。招待状を送る相手は、A高校の先生、日本生徒、外国人留学生です。招待状をそれぞれに向けて、簡単に作ってみて下さい。ただし、招待状には次のことを必ず入れて下さい。

- 交流会の日程：3月12日（火）午後1時～、体育館
- 記念誌を作る予定なので、各自3cm×3cmの写真を持ってくること。

筑波大学附属高等学校 1 年 5 組 (男)・女

(1) A高校の生徒（日本人）向けの招待状


こんにちは。
この度我が校と御校の交流を深めるため下記の日程で交流会を開催します。
お暇を方はぜひいらして下さい。
時：3月12日（火）午後1:00～
所：筑波大附属高等専攻体育館。
なお、記念誌を作成する予定なので、各自3cm×3cmの写真を持って来て下さい。



(2) A高校の生徒（外国人留学生）向けの招待状


(※この留学生たちは、まだあまり日本語ができません)

こんにちは。
今度、筑波大附属高校とA校の友好のために下の時間、場所でパーティーを開きます。
時間：3月12日（火曜日）P.M.1:00～
場所：筑波大附属高校体育館。
記念の本をつくるので3cm×3cmの写真を持って来て下さい。



(3) A高校の先生向けの招待状

拝啓
風薫る五日、いかがお過ごしでしょうか。
さて、この度我が校と御校の交流のため、下記の日時、場所で交流会を開催することになりました。ぜひいらして下さい。
時：3月12日（火）午後1:00～
所：拙校体育館。
なお、記念誌を作成致しますので、各自3cm×3cmの写真を2特考下さい。



敬具

※ご協力ありがとうございました。